The Japan Lung Cancer Society

富田正雄

75歳の男性が検診で右肺門部の8cm大の腫瘤陰影を指摘され，気管支鏡下生検で扁平上皮癌と診断された．胸部CT及び遠隔転移の検索にてc-T2N1M0と診断されたが，縦隔リンパ節の検索のため行った食道超音波内視鏡にて左房内の腫瘤陰影を指摘し，c-T4N1M0の診断で人工心肺下に右中下葉切除＋左房合併切除を行った．術後診断はp-T4N0M0であった．術後4カ月に直腸ポリープで粘膜切除術をうけ，直腸転移であった．

11．QOLを考慮した肺癌患者の胸水ドレナージ

熊本市民病院呼吸器科
田中不二穂，平田菜穂美
福田浩一郎，寺崎泰弘
平山正剛，岳中耐夫，杉本峯晴
志摩　清

肺癌胸水患者10例に対しQOL向上の目的でIVH用のArgyle Medicut Catheter Kit，14GとPTCD用排液バッグを用い閉鎖回路で自然落下方式による胸腔ドレナージを施行した．ドレナージ中は歩行も可能であり，癒着術を施行した6例中4例が有効であった．

12．癌性胸水に対するハイムリッヒ弁を用いたドレナージ療法

鹿児島大放射線科　飯田清高
向井浩文，宮園信彰，井上裕喜
中條政敬
鹿児島済生会病院　岡　春己

方法は，16～24Frのトラカールチューブを胸腔内に挿入，ハイムリッヒ弁(一方向弁)を持続し，自然滴下で胸水を排液後，薬剤を注入し，その後も自然滴下で排液し，胸水が陰性化した時点，また陰性化しなくても10日目で抜去した．

使用薬剤は，CDDP，MMC，ミノマイシン，OK-432で，原発性肺癌3例，転移性肺癌2例の6病変に施行し，結果は著効が3病変，有効が1病変，無効は2病変であった．

13．肺癌における腫瘍マーカーの有用性

大分県立病院胸部外科
村岡昌司，内山貴堯，山岡憲夫
岡　忠之，佐野　功

腫瘍マーカー(CEA，SCC，NSE，SLX)の肺癌における有用性を検討した．組織型別の陽性率ではCEAがAdeno：48%，SCCがSq：38%，NSEがsmall：37%，SLXがAdeno：43%と各々高率で病期の進行と共に上昇した．術前値と予後との関係では，腺癌，stage I 症例で術前CEA陽性群が陰性群より予後不良で，特に10ng/ml以上の高値では再発率が高かった．また術後陰性化例でも腺癌，n2以上ではCEA再上昇を伴う再発の危険が高く，CEAは再発の予知に有用であると考えられた．

14．原発性肺癌におけるシアル化Le^{x}測定の意義

国病九州がんセンター
横山秀樹，高梨伸子，松岡泰夫
田山光介，井上　隆
矢野篤次郎，麻生博史
一瀬幸人

はじめに：CSLEXの腫瘍マーカーとしての有用性を検討した．対象・方法：対象は肺癌111例である．(腺癌60，扁平上皮癌38，小細胞癌13)対照として非癌症例27例を用いた．患者の血清中のCSLEXをELISA法にて測定した．結果：肺癌例の血清CSLEX値は対照よりも高かった．組織別では腺癌が高値を示し，病期が進むほどその値は上昇した．感度，特異度，精度はCEA，SCCと同等であった．

15．非小細胞肺癌(NSCLC)における染色体構造異常の検出－Chromosome Painting ProbeによるFluoescence in situ Hybridization(FISH)法を用いて－

長崎大第1外科
藤瀬直樹，田川　泰，辻　博治
赤嶺晋治，高橋孝郎，中村昭博
川原克信，綾部公懿，富田正雄

NSCLCの切除症例より癌細胞の短期培養を行い染色体標本を作製し今回3番，17番に特異的なchromosome painting probeを用いたFISH法により構造異常の検出を試みた．初代培養は腺癌において成功率が高かった．本法により腺癌症例で3番，17番染色体の転座，欠失が同定できた．本法は短時間に多くの細胞の染色体を観察することができ，構造異常の検出に有用な手段の一つであると思われた．

16．肺癌患者におけるPolymerase Chain Reaction (PCR)を用いたAdenovirus DNAの検出及び定量

九州大胸部疾患研　桑野和善
原　信之
北九州市立松寿園内科
松葉健一
UBC Pulmonary Research Laboratory　J.C. Hogg

肺癌とLatent Adenovirus Infectionとの関連性の有無をPCRを用いて検討した．その結果，肺癌患者の肺実質には，対照群と比較して有意に多くのAdenovirus E1A DNAが検出され，肺癌の危険因子の一つである可能性が示唆された．

17．当科で経験した肺癌多発家系の検討

長崎大第1外科

NII-Electronic Library Service